

平成 22 年 4 月 9 日現在

研究種目：若手研究 (B)
研究期間：2007 年 ～2010 年
課題番号：19720119
研究課題名 (和文) 日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるモダリティ使用
研究課題名 (英文) Modality Markers in Argumentative Writings by Native Speakers of Japanese and Learners of Japanese
研究代表者
伊集院 郁子
東京外国語大学 留学生日本語教育センター・講師
研究者番号：20436661

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：第二言語教育・中間言語語用論

1. 研究計画の概要

研究の全体構想は、日本語学習者の中間言語における語用論的側面の実態を明らかにし、得られた知見を日本語教育に還元することにある。その一環として、本研究では、日本語母語話者と日本語学習者 (中国・韓国) の意見文に出現するモダリティ (書き手の心的態度) の相違を分析し、日本語学習者に対する作文指導の指針を示すことを目的とする。具体的には、以下の3点を目指す。

- (1) 日本語母語話者の意見文に典型的に出現するモダリティを抽出することで、日本語母語話者が意見文で用いる言語表現のプロトタイプを提示する。
- (2) 学習者のモダリティ習得に関し、母語別にその傾向を捉えることで、母語干渉の問題を指摘する。さらに、学習時間数とモダリティ使用の傾向に関係があるか分析する。
- (3) 中間言語の研究者が様々な視点から分析を加えられるよう、将来的に、収集したデータを言語コーパスとして整える。

2. 研究の進捗状況

当初の計画通り、次の作業を行った。

- (1) 日本語母語話者 134 名、台湾人学習者 57 名、韓国人学習者 55 名より日本語意見文を収集し、策定したマニュアルにしたがってデータベース化した。
- (2) 分析の観点より必要なコーディング (文機能、モダリティの種類) を行った。コーディングは認定基準を策定したうえで研究協力者と 2 名で行った。
- (3) データベースの整備と並行し、分析を開始した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
国内外の研究協力者の協力を得て、予定通り、データを収集し整備することができた。

4. 今後の研究の推進方策

分析に必要なデータを時間をかけて作成・整備し、ほぼ最終段階に至っているため、今後はデータの本格的な分析に移る予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティー日本・中国・韓国語母語話者の比較ー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36 号, 13-27

伊集院郁子・横田淳子 (2010) 「JLC日本語スタンダード」に基づいた中級段階における文章表現指導の試みー『意見文』の指導を中心にー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36 号, 85-100

[学会発表] (計 1 件)

伊集院郁子・高橋圭子 「日本語作文における意見の述べ方ー中国・韓国・日本語母語話者の文末のモダリティの比較ー」第 23 回社会言語科学研究大会 (2009 年 3 月 東京外国語大学)